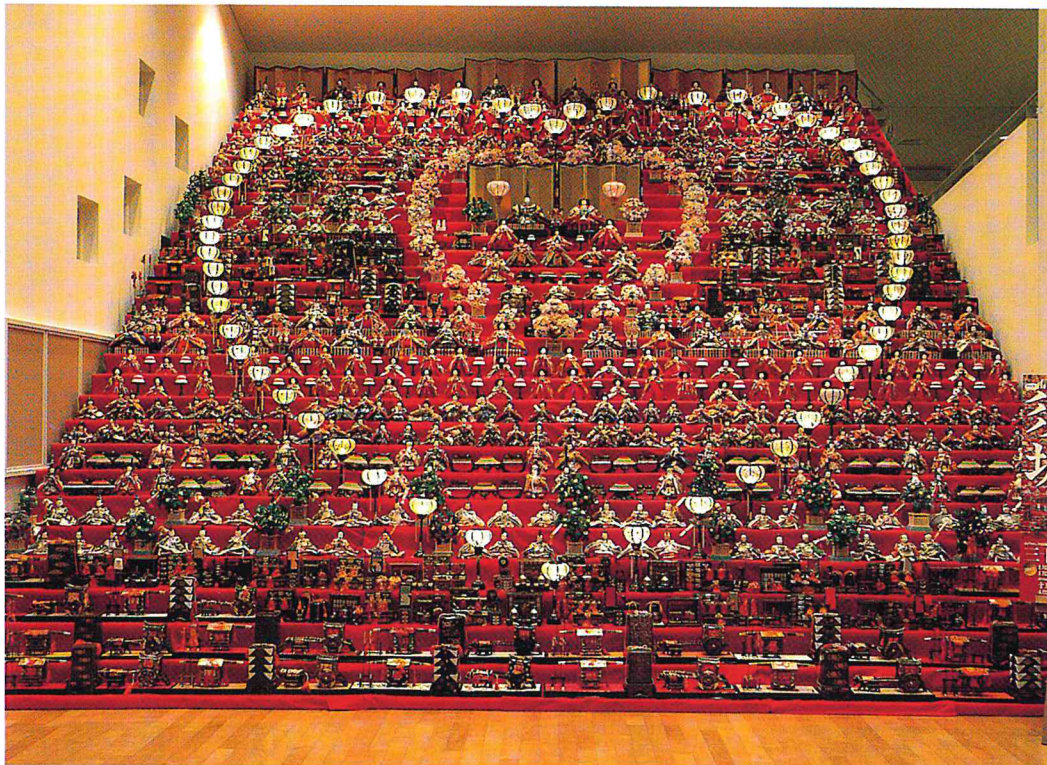




三十段飾り千体の雛祭り

須坂市

須高保護だより

第11号

令和4年3月1日

発行 須高地区保護司会

編集 総務部

ご挨拶

須坂市長 三木 正夫



須高地区の更生保護関係の皆様には、日夜地域の更生保護活動にご尽力を

ただいておりますことに、心から敬意と感謝を申し上げます。

昨夏、開催された東京オリンピック・パラリンピックは、新型コロナウイルスの影響により無観客での開催となりましたが、トップアスリートによるパフォーマンスは、多くの人々に勇気と感動を与えました。その中でアスリート自身による人種差別の抗議表明やジェンダーへの対応など、人権に関する新たな表現や対応がありました。

現在、私たちを取り巻く環境は、二年以上感染が続く新型コロナウイルスなどの新しい生活様式を強いられ、地域、職場、家庭での人間関係の希薄化や、社会の中での孤立を助長し、経済活動の停滞は新たな生活困窮者を生み出すなど、私たちの生活に、さらに“生きづらさ”を感じさせています。

近年の犯罪の傾向としては、刑法犯の検挙件数は減少傾向にあるものの、再犯者率は上昇しており、犯罪や非行を行った人の社会復帰の難しさがうかがわれます。

須坂市では、二〇二二年三月に、「みんながつながり、支え合う、共に生きるまちづくり」を基本理念とする第3次須坂市地域福祉計画・第4次須坂市地域福祉活動計画を策定し、その中で犯罪や非行を行った人が、地域社会の中で孤立することなく、社会の一員として復帰し、犯罪被害のない安全・安心に暮らせる地域づくりを目指すとして、「再犯防止推進計画」を定めました。その実現のためには、不幸にして犯罪や非行を行った人に対して社会復帰のための地道な支援や犯罪予防活動等にご支援をいただく保護司の皆様のお力添えが必要不可欠であります。今後とも行政と協力し合い犯罪のない明るい社会づくりに寄与いただきますようお願いいたします。

コロナ禍の中、日々の活動にご尽力をいただいている須高地区の更生保護関係の皆様から感謝を申し上げるとともに、ますますのご発展とご活躍をご祈念申し上げ、ごあいさつとさせていただきます。

須高地区保護司会

会長 三木 一徳



今年度も昨年度に引き続き、新型コロナウイルス感染症防止のため、総会が開催できず、書面表決による役員改選により、会長に就任しました。微力ですが、今後ともよろしくお願い申し上げます。

これまでに、多くの事業が中止を余儀なくされましたが、今後も、コロナ禍の中、各種事業、サポートセンター運営等を工夫して継続する必要があると思います。

昨年は、少年法等の一部改正が行われ、改正少年法が令和四年四月一日に施行され、同日から成年年齢を十八歳とする改正民法も施行されます。

これにより、十八・十九歳の人は、犯した事件で起訴された場合には、実名、写真等の報道が解禁される等、社会において、責任ある主体として積極的な役割を果たすことが期待される立場になりました。

また、近年、刑法犯の認知件数、検挙人数が、ともに減少傾向にある中、大麻等薬物事犯の検挙人員は増加傾向

にあるといわれており、若年層の薬物使用（特に大麻）問題を見聞きする機会が増えています。

こうした状況下で、更生保護関係機関、地域、行政の連携した取組みに期待が寄せられており、保護司に期待される役割も増えていくと思われます。本年も、関係機関、地域の皆様には、更生保護活動に対して引き続きご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

須高地区更生保護女性会

会長 花岡 君江



令和になって早四年目、コロナ禍のため、何の活動もできないまま、一年が過ぎてしまいました。

役員会で、今年度の活動はどうしたらよいだろうかと相談しました。新型コロナウイルスのため、十五年以上須高地区の保育園に送り続けてきた記念品「愛の鈴」「座布団ゴマ」の作成は、人の手を介して作ることについては心配だということ、今年も「絵本コウくんときいろいはね」を須高地区保育園・幼稚園に送ることにしました。本の内容

は心の成長に役立つ、

「こめんなき」とすぐに言えることを応援する絵本です。社会を明るく

する運動の一環として、犯罪のない安心して住める社会を目指し、純粋な子どもたちの健全育成のため、女性会では、少しでもお役に立ちたいと活動しています。また、長野刑務所の受刑者の皆さんに書籍、更生施設裾花寮への激励金を送り、更生のための支援をしております。

罪を犯した人たちは、それぞれの理由があり、自制心を抑えることが出来なかった人たちです。そんな人たちにやさしい心が届いたならと支援し、大変喜ばれております。少しでも反省して更生してもらいたいという願いから支援してきました。私たちの役目は、母親として、子どもから大人までやさしい心で接していき、また、地域における犯罪予防や子どもたちの健全育成のための支援活動を行うボランティア



羽・バッチ

なのです。そのシンボルの幸福の黄色い羽根をつけて活動します。本年もどうぞよろしく願いいたします。

須高地区更生保護協力事業主会

会長 大井 教雄



コロナ禍で、始まりコロナで終る時代になって、五十億円出し宇宙に行く時代になって来ました。

我々、日本人は、規則を守る義務があるのですが、友達の間で、ギクシャクになりがちな時代になってきている事が多い時代になり、又法則が破られる事を、世間でも、火に油を、見さかいかつかない先輩又、親戚等が関係の無い自分達の邪魔をしたりする傾向になりかけている状況も見えてくる頃です。事業主も相手が、どんな人か色々と捉えることは、無理だと分かるし、どうすれば、通じ合う事が出来るか、何かと考えたとき、ソフトボールで何か合い通じるものがあればと思います。今後も相手様の意見を聞き入れていかなければと思う今日です。どうぞよろしくお願い申し上げます。

第71回「社会を明るくする運動」 第13回須高地区 作文コンテスト

◆小学生の部

▽最優秀賞 「社会を明るくするために私ができること」 佐野結里Ⅱ仁礼6

▽優秀賞 「犯罪・非行のない地域社会づくり」 木村拓未Ⅱ旭ヶ丘6

▽入選 大澤夏希Ⅱ旭ヶ丘6 川中淳平Ⅱ仁礼5

◆中学生の部

▽最優秀賞 「明るい社会を見つめる運動」 岡山杏子Ⅱ常盤3

▽優秀賞 「勇気へとつながる一步」 星沢花風Ⅱ墨坂2 「おばあちゃんの言葉」 増田多英Ⅱ高山1

▽入選 山岸結奈Ⅱ相森3 富沢健太Ⅱ相森2 松本華奈Ⅱ墨坂2 坂田愛華Ⅱ東1 黒岩紗葵Ⅱ高山1

令和3年度、須高地区作文コンテストが実施されました。佐野結里さんと岡山杏子さんの作文を紹介します。

小学生の部 須高最優秀賞

社会を明るくするために私ができること

仁礼小学校六年

佐野 結里^{ゆいり}

私は考えました。今の社会よりもつ

と明るく、誰もが住みやすい社会にするために私ができることを二つ挙げます。

一つ目は、「あいさつ」です。「おはようございます」「こんにちは」「さようなら」「ありがとう」など簡単にできるのがあいさつです。私は学校の先生やクラスみんな、近所の方々に進んであいさつができますが、他学年のみんなにあいさつするのはとても勇気が

必要です。なぜそう思ってしまうのだろう：私たちの学校では、「あいさつプロジェクト」を行っています。この活動は全校のみんなが「あいさつ」に関わる活動です。校内ですれちがう時も六年生が中心になり「あいさつ」を広めています。私はクラスの人などといっしょなら他学年のみんなにもあいさつができます。クラスの人などと同じ気持ちでがんばれる気がします。

数年前、家族で東京に行った時、ホテルの朝食の時に外国の人に「ハロー」と声をかけられ、びっくりしたけど私も「ハロー」とあいさつをしました。笑顔であいさつができたことを今でもうれしくて覚えています。

あいさつの言葉は世界中の国によつてちがうけど、知らない人でも笑顔になれます。自分からあいさつすることとは勇気が必要だけど、すぐに笑顔になれるのでこれからもあいさつを大切にしていきたいと思っています。

二つ目は「ゴミのない社会」です。

私は近所の公園で友達と遊びます。公園の中にカップラーメンやお酒のゴミが落ちています。コロナウィルスの予防で拾うことはやめています。とても悲しい気持ちになります。たくさん落ちていたときは、町の役員に伝えて拾ってもらったことがあります。私も

公園でおかしを食べることがあります。ゴミは袋に入れて家に持ちかえり、分別してすてています。ゴミをすてていく人は、どんな気持ちなんだろう：ゴミを拾っている人がいることを知っているのだろうか。

川や海のゴミが増えていくことも知っています。人間だけでなく、魚や虫、動物や環境にも影響があると思います。

私は、学校で環境委員長をしています。あき缶集めをしたり、無言清掃を取り組めるように全校のみんなの前でスピーチをしました。あき缶は、リサイクルができます。無言清掃は、そうじに集中することで、みんなが過ごしやすい学校にするためです。相手を思いやる気持ちを大切にしています。これからも、今できることを大切に活動をしていきたいと考えています。この気持ちは、大人になっても忘れないようにしたいです。

私ができることは、小さなことかもしれないませんが、自分のため、みんなのために心をかけて考えたことを実行したいと思っています。

相手を思いやる、やさしい気持ちが広がりゴミのない社会が、明るく住みやすい社会であると私は考えました。実現できるようにがんばりたいです。

中学生の部 須高最優秀賞
県優秀賞

明るい社会を見つめる運動

常盤中学校三年

岡山 杏子 きようこ

七月二十六日、相模原殺傷事件から今日で五年を迎えた。被害者の皆様やそのご家族の思いは、私には量ることもできず、言葉に表すこともできない。

二〇一六年七月二十六日未明。事件は発生した。神奈川県相模原市の知的障害者施設「津久井やまゆり園」に元職員の男が侵入し、四十五人を殺傷。うち十九人が亡くなった。

この事件がおきたとき私は九歳。事件の記憶は皆無に等しい。しかし、中学一年生の夏、事件をとりあげた新聞記事を呆然と食いつくように見つめた。記憶は曖昧であっても、くり返されるテレビのニュースを祖母の隣でぼんやりと見ていた九歳の私の心に、大きく報道されただろうこの事件の衝撃は、たしかに刻まれていた。記事を読み、事件の概要をあらためて知った。込みあげた思いは、犯人に対する憤りだった。そして、被害者や遺族に対しての、悲しみだった。しかし、心の底に一粒の涙が落ちるように、十九人も

の命を奪った犯人に対して、「切なさ」も感じたのだった。

その年の春に私の中学で行われた支援学校交流会というものを思いだした。支援学校と私が通う中学は毎年交流をしていて、その日は、自己紹介などの対面式だった。そのときの、支援学校の先生のお話を、私は今でも覚えている。通る声が体育館に響きわたった。

「須坂支援学校という名前には『特別』という言葉が入っていません。『特別』支援学校としないのは、何も特別ではないからです。皆同じで、違う個性をもった仲間です。」

私ははっとした。そして自問した。数分前支援学校の生徒たちの自己紹介を、私はどのように見ていたのか。聞いていたのか。

裁判で「意思疎通のできない重度障害者は不幸を生む」などと主張した犯人と同じではないか。無意識のうちに、自分の感覚やら既成概念やらが、自分を優位におき、見下ろし、違う人ととらえていた自分に気づいた。

中学二年生の秋。体育祭で交流をした。種目は玉入れだった。自分のクラスの入りがたついているところから、少し離れたところに支援学校の生徒たちが集まっていて、そのうちの二人がすぐそばに駆け寄ってきた。必死

になって投げていた私の目に、そのうちの一人が投げた玉が写った。太陽が照らし、黒い影となって宙に舞いあがった玉を見て、私は唐突に「入れ」と願った。その瞬間、私はあることを感じた。それは、「隔て」だ。私は無意識に、理由もなく、目を向けていた自分がいたことに気づいた。そして自分の弱さを改めて思い知り、恥ずかしいと感じた。かごにはねかえされ、地面に落ち、コロコロと私の足下に転がってきたボールを拾い、かごへ投げた。「つながり」を感じた。

中学三年生のときの、人権教育月間では、人種差別や感染症による人への差別などについて学び、深く考えさせられた。一つは、人が「自分と違う」という気持ちで、人を排除していく怖さだ。肌の色、国籍、ハンセン病、犯罪などを差別対象として目を向ける人は、昔も今もいることが分かった。差別される人の側の視点で見ると、差別する人は、無責任でひどい人として写るが、差別する人は自分のした事、言った言葉を気にすることなく、人を傷つけているということを知らない。結局、差別される側の人が弱者になって、耐えるか、自力で乗り越えるしかない現状を知った。

私があの新聞記事を読んで「切ない」と思ったのは、犯人の心が見ていた景

色が、自分も分かってしまいそうな気がしたからだ。私は、中学三年間で自分の弱い心が見ていた偏った世界から抜け出すことができた。その世界は、勝手に知らぬ間に、今まで生きていく中で形成されてしまっていた。

この事件は未然に防げたのではない。中学校での経験、気持ちの移りかわりからそのようなことを思う。だからこそ、これからの未来で、このようなことが二度と起こらないようにできると考える。そのために一人一人の意識改革が必要だと思う。障がい者に限らず、自分と相手との「隔て」をなくしたい。しかし、「隔て」は気づかぬうちにつくられてしまう。社会の環境も一因だ。区切りや境界線が見えていたり、感じられるときはよくある。しかし、お互いが自分に合った支援をうけ、生活ができる環境をつくるのが最優先だ。それを理解した上で、学校などの場で「交流する」機会を自然につくれる社会を目指したい。今までの私や、犯人をもつとはやく救うことのできるつながりを増やしたい。

中学三年生になって、私はJRC委員長という役職をもらった。今年の秋に、全校から集めたバルマーク、古切手を支援学校へ届けに行く。笑顔を共有し、広い視野で、この明るい社会を見つめたい。

はじめての対象者

元保護司 竹前 郷史



この度、退任に
当って御世話になっ
たすべての皆様に関
謝申し上げます。振

り返れば平成元年に保護司の拝命を受け保護司の内容を、しっかりと把握出来ないまま、早速対象者の辞令を戴きました。通知書の中には何回も窃盗を繰り返し数々の犯例が書いてありました。独身者でした。孤立・就学上の問題・貧困等の経済的な問題がストレスの引き金となり、感情がコントロール出来ず、悪循環が続いていたようです。再犯を繰り返す、その結果、社会から見放され、生活に困窮し、盗むしか生きるすがなくなり、罪を犯す繰り返してありました。いかなるつらい事があっても逃げず、努力することが大事であると説明し指導してきました。又面接日を調整し本人の気持ちに沿って考え、必ず習慣化する様に心がけしました。世間の話しを、とりいれながら対象者が心のうちを語ってくれるように

努力しました。来訪を重ねるうちに、

本人が働く意欲を徐々に示しはじめました。高度経済成長を目指す中、地域で人と人との希薄化、他人の無関心、家庭の孤立化によるモラルの低下。こうした社会の変化が現在の犯罪の背景にあると私は実感しました。

藍綬褒章を受章して

保護司 小松 善正



藍綬褒章をいただき
く事の出来ました事
も、保護司会の皆様
方と力を合せた結果
であることより感謝しております。

私も今日まで多くの役職をさせていだ
だいた経過がありますが、保護司が
一番やりがいのある内容であると思っ
ております。

数年前に女房とスーパーで買い物をして
いたところ走ってきた男性がおり、
先生その節は大変ありがとうござ
いましたと御礼をいわれました。十数
年前に担当させていただいた方でし
た。充実をした生活をしているように

した。又話をしようと言われてました
が、女房もお父さん保護司をやって
いて良かったねと言ってくれました。私
も大変うれしく思いました。

これからも私の担当した方々とは出
来るかぎりお付き合いをしていきたいと
思っております。

保護司会皆様方に重ねて御礼を申し
上げ、報告いたします。

保護司になつて

保護司 半田 直道



私が保護司に任命
されたのは令和元年
十二月、長野市の保
護観察所で保護司の

委嘱状を受け、研修会で保護司につい
ての研修を受けるまで、保護司は何を
する人なのか知りませんでした。

どうか私のところに依頼が来ないで
と願っていましたが、一年を過ぎた頃
に生活環境調整を受け持ちました。私
にできるのだろうかと不安の中で、保
護観察所から書類が届きました。あら
はじめ対象者の状況や要望を把握し、

自分なりにシナリオを準備しておき、
身元引受人に電話するも本人単身赴任
中とのことで中々日程が合わず報告期
限が迫る中、こちらに帰ってくる日を
聞いて何とか面接をすることができま
した。その後半年ほど経過して、保護
観察所より生活環境調整追報告依頼が
あり、またまた身元引受人との日程調
整に苦労して面接を行いました。前回
報告の時と変化がなく一安心しまし
た。

現在、県更生保護大会、地区総会や
社会を明るくする運動など関係事業が
コロナ禍で開催されず、やっと地域別
の研修会が開催されるようになりました
が、同じ須高地区の保護司の皆様と
ゆっくりお話をする機会がありません。
早く通常の生活にと願っております。

結びになりますが、保護司として、
一人の人間として、人の苦しみや悲し
み、そして喜びを共に分かち合える須高
の保護司として最善を尽くしたいと思
います。



須高地区保護司名簿

令和4年2月現在

氏名	住所
花岡 君江	須坂市旭ヶ丘
高津 孝道	須坂市大字日滝
小林 晃	須坂市大字日滝
篠塚 真一	須坂市大字須坂
菊池 健造	須坂市大字日滝
坂田 正夫	須坂市大字塩野
花形 多美子	須坂市大字坂田
町田 榮司	須坂市臥竜
水澤 弘行	須坂市大字亀倉
増澤 秀譽	須坂市大字仁礼
野平 芳一	須坂市大字野辺
佐藤 友二	須坂市望岳台
業田 明子	須坂市大字八町
竹内 三男	須坂市大字八重森
原 憲一	須坂市大字塩川
嶋倉 崇雄	須坂市大字中島
市川 栄子	須坂市大字福島
三木 一徳	須坂市大字相之島
関 政雄	須坂市大字小河原
齋藤 友吉	須坂市大字小河原
森川 千恵子	須坂市大字須坂
小松 善正	須坂市大字須坂
半田 直道	須坂市墨坂南
市村 多喜子	小布施町大字小布施
竹内 宏美	小布施町大字小布施
葦澤 義文	小布施町大字大島
跡部 由美子	小布施町大字押羽
林 映寿	小布施町大字雁田
佐藤 育子	高山村大字高井
西原 ちえ子	高山村大字中山
澁谷 恵津子	高山村大字中山
黒岩 隆弘	高山村大字牧

令和三年度年間活動報告

新型コロナウイルス感染症の影響で、多くの事業が中止等を余儀なくされる中、感染防止対策をとりつつ、次のとおり行われました。

- ・定期総会 会議に代え、役員改選を含め書面表決により実施(五月)
- ・須高地区社明推進活動 例年の街頭啓発に代え、広報媒体による啓発を実施(五月)
- ・社明講演会 実施通知後、コロナの状況変化を踏まえ中止(八月)
- ・作文コンテスト 昨年度は見送ったが、今年は実施、表彰式中止(二月)
- ・県更生保護大会 縮小開催され、少人数で参加(十月)
- ・地区別定例研修会 第Ⅰ期研修延期に伴い、第Ⅰ期とⅡ期を十一月同時開催、三期研修会中止(二月)
- ・サポートセンター運営 毎週月水金

第66回

長野県更生保護大会

十時から十六時まで企画調整保護司駐在、企画調整会議を毎月開催、面接等にも随時利用

・須高保護だより第十一号発行(三月)

・通年 各部会開催(総務、犯罪予防、研修、協力組織部会 随時)

令和三年十月二十九日、小諸市文化会館において開催されました。今回はコロナ禍のために、参加人数を三五〇人に抑えて、開会式前「コカリナ」演奏と北佐久地区の保護司会からの活動報告がありました。

引き続き顕彰式典が行われ、須高地区から次の方々が受賞されました。

藍綬褒章 小松善正
法務大臣表彰



市村多喜子 故 渡辺章宏
全国保護司連盟理事長表彰
跡部由美子 佐藤友二
関東地方保護司連盟会長表彰
竹内宏美 林 映寿 森川千恵子
長野県知事表彰
花岡君江
長野県保護司会連合会長表彰
澁谷恵津子
須高事業主
保護観察所長感謝状
雇用主 菊池健造

須高更生

関東地方更生保護委員会委員長感謝状

更生 高野範子

受賞者の皆さん

おめでとうございます

保護司の異動

◎退任保護司

小柳邦義(令和三年五月十九日付)
故 渡辺章宏(令和三年十月九日付)
竹前郷史(令和三年十一月三十日付)
長年のご活躍に心より感謝を申し上げます。

◎新任保護司

小林 晃(令和三年十二月一日付)
坂田正夫(令和三年十二月一日付)
関 政雄(令和三年十二月一日付)
今後のご活躍をご期待申し上げます。

あとがき

巻頭言をご寄稿頂きました三木須坂市長様に心からお礼を申し上げます。日に々に陽ざしが暖かくなる三月。まもなく新年度が始まるうとしております。

新入生や新社会人など希望にみちた日々をすごしている事と思います。今年こそ、コロナや犯罪のない何の心配もない日常になって欲しいと願うのは、全住民ではないでしょうか？何としても明るい社会であって欲しいものです。今年の長野は、善光寺の御開帳、諏訪の御柱と大きな祭事が続きます。神仏の御加護をいただいて願いがかなうといいですね。(総務部)